

復活の主と教会

安田 吉三郎

しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行つて、イエスの指示された山に登つた。そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑つた。

イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの權威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行つて、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖靈の御名によつてバプテスマを受け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

マタイの福音書二八章16—20節（新改訳）

マタイの福音書は、復活の主と十一人の弟子たちとの出会いを、ガリラヤの「指示された」山の場面に限定して報道しております。これは、エルサレムおよびその近郊における顕現に言及しているルカ、ヨハネの福音書の復活記事との著しい相違であります。マタイ伝およびマルコ伝は、最後の晩餐のあと、ゲツセマネの園に向かわれる途中で、

主が弟子たちに「あなたがたはみな、今夜、わたしのゆえにつまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散り散りになる。』と書いてあるからです。しかしわたしは、よみがえつてから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます」と、ガリラヤでの再会を予告されたことをしるしています。エルサレムのとざされた家屋内における復活の主の顕現は、弟子たちの心から疑いを取り除きました。しかし復活の主が弟子たちにご自身を現わされる目的は、それだけに尽きるものではありません。主は「散り散り」になつた羊を、もう一度なつかしいガリラヤの明るい自然の中に集め、神のみ国の建設のための大号令をお掛けになるのです。復活の場面を描くマタイの筆は、このガリラヤでの再会に焦点を置いて書き進められます。二八章7節のみ使いの言葉と、10節の主ご自身の言葉の中で、「ガリラヤに行け」との命令が繰返されているのをみれば、よくわかります。

十一人の弟子たちは、主の命令通りにガリラヤに行き、指示された山で主にお会いしました。マタイは、明言はしておりませんが、この時ガリラヤの山に参集したのは十一弟子だけではなかつたでありません。み使いの言葉の中の「お弟子たち」（二八7）、および主イエスのお言葉の中の「わたしの兄弟たち」（二八10）は、どちらも、十一弟子に限って用いられるということではなく、広く信者たちという意味に用いられます。十一弟子たちは特に主のそば近くにはべり、その周囲をたくさんさんの一般の弟子たちが取り巻いている光景を心に描くことができます。第一コリント一五章6節で、パウロが「その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現われました」と述べているような顕現の実例を、福音書や使徒の働きの記述の中に直接見出すことはできませんが、ガリラヤの山は背景として最もふさわしいのではないのでしょうか。

マタイの、「しかし、ある者は疑つた」（二八17）という表現は、十一弟子の中に依然として、主の復活を疑う者がいた、と思わせるような書き方ですが、恐らくそうではないでしょう。ガリラヤに来るまでに、十一人は皆それぞれ

復活の主に出会っており、疑いはもはや残っていないと思われるからです。しかし、五百人以上の兄弟たちの中には、まだそのような恵まれた体験を与えられていない者もいたはずですから、その中には確かに「疑う者もいた」でありましょう。しかし、それらの人々も今は目前に栄光の主を拝し、使徒たちと共に、主の大号令を聞いて、心は信仰の喜びに燃え上ったことでしょう。

さて、主は、かつて、ピリポ・カイザリヤにおいて、ご自身の教会の建設についてペテロに予告されました。「あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます」(マタイ一六18-19)と。その時点において、キリストの教会はまだ存在せず、実現は将来のこととして約束されているだけです。この約束の実現は、福音書を越えて使徒の働きの時(ペンテコステ)を待たねばなりません。すなわち、五旬節の日に、弟子たちの上に聖霊が臨み、彼らが聖霊に満たされて、イエスは主キリストであると宣べ伝え、人々に悔い改めを要求し、これを受け入れた人々が、イエス・キリストの名のバプテスマを受けて弟子に加えられる、という力あるみわざにおいて、主の約束は実現するわけでありました。

しかしこの使徒時代の教会を理解するために、マタイ二八・16以下の出来事は非常に重要な意味をもっておりません。たしかに、この箇所には「教会」という言葉も「神の国」という言葉も用いられておりません。「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます」と言われた時に、教会がその上に建てられるところの「基礎」と、これを建てようとするお方の「権威」が何であるかということが問われるわけです。二八・16以下は、この問いに対する復活の主のご自身の答えであると言えます。したがって、二八・16以下を、キリストの教会建設の意図、という大きな文脈の中に置いて理解することが出来るわけであり、それはまた、一六・18-19および二八・16以下というマタイ独自の重要な二つの章句を解釈する上で非常に大切なことである、といわなければなりません。

さて、復活の主は礼拝している弟子たちに近づいて来て、厳かに言明されます、「わたしは天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」これは復活に基づく主イエスの新しい権威についての言明であります。このような主ご自身の積極的な宣言の故に、ペテロは、ペンテコステの説教において、主の復活を詩篇、一一〇篇1節「主は私の主に言われた。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまではわたしの右の座に着いていなさい」の実現として示すことができ、「神は、今やイエスを主ともキリストともされた」と語るのであります(使徒二34-36)。パウロも「御子は……聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された」と述べて(ローマ一3-4)、復活が、キリストのみ子としての権威の新しい出発点であることを明らかにしております。

その権威の新しいさは、世界教会の建設という大事業と深くかかわっているのであります。エペソ一章20-23節におけるパウロの言葉は最も明瞭であります。「神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。」主は、ご自身のからだとしての教会を建てようとするのであります。その教会は、「あらゆる国の人々」から成る世界教会であります。

彼らは、「父、子、聖霊の御名によるバプテスマ」を授けられます。「御名による」というのは、「名義の者となる」と解することができますから、洗礼を受けたキリスト信者は、三位一体の神の名義の者、すなわち、神に所属する

者、という意味であります。旧約のイスラエルは、「祭司の王国、聖なる国民」(出エジプト一九六)、「主の聖なる民」(申命七六)と呼ばれました。彼らは、「地の面のすべての国々の民のうちから、選ばれて、神の宝の民」となったのです。そこには、イスラエルが神の特別な所有であるという思想がはつきりとあらわされており、神の特別な愛の対象であり、エジプトから贖い出されたものであります。また、彼らに与えられた律法は、彼らの生活が全面的に主の所有であることを表明しております。イスラエルはまさに、この生の全領域にわたって、神の主権のもとに置かれたのであります。主イエス・キリストは、今や、復活を契機としてお受けになった新しい權威を行使して、一民族ではなく、全世界のあらゆる国民の間にご自身の民を、ご自身のからだなる教会として建てようとするのであります。この新しい神の国の民としてのキリスト者は、旧約のイスラエルと同じように、その生活のすべてを挙げて神の所有となるのであります。

復活の主を礼拝している十一弟子を中核とする主の弟子たちは、ガリラヤの山において、このような主の御意図を示されたわけであります。「あらゆる国の人々を弟子とせよ」「御名によってバプテスマを授けよ」「わたしが命じておいたすべてのことを守るように教えよ」、これらの命令のひとつひとつに、ご自身のものとしての教会を建てようとしておられる主の力強いみ旨を仰ぐことができます。この主の号令こそ、わたしたちキリスト者が常にそこに立ち帰ってゆかねばならない、いわゆる原点であります。今回は、二つの点を特に強調したいと思います。

第一の点は、一つの全体性としての教会、ということですが、すでに検討して来たところで明らかであると思えますが、世界伝道の大号令をかけておられる復活の主の前にひざまずいている弟子たちは、それ自身が世界教会のモデルであります。彼らは復活の主を唯一の主と仰ぎ、その主権を無条件に承認し、またその命令をことごとく聞いて行なう僕であります。彼らの生活はことごとく主にささげられております。彼らの大多数は、ガリラヤに生活の根拠をもっていた者たちであります。「異邦人のガリラヤ」と呼ばれているように、旧約の預言者の目からみても、また当時のユダヤ教徒の目からみても、ガリラヤ人は雑種でありました。しかし、彼らはいま、主イエスにある一つの全体性の下に互に結び合わされております。さらに、弟子たちの中には、ユダヤ、特にエルサレム出身の者もいたでありました。彼らは、律法に生きる人々であります。彼らは、律法の民としての全体性の中に誇りと安心を見出していた人々であります。彼らは、彼らの生活を強力に規制するユダヤ人社会から、いわば飛び出して、キリストの弟子となった人々であります。主イエスを信じ、これに従うことを個人的に決断した者たちの群れであります。彼らは個人的にキリストに結びついたのでありますが、しかし決して個人主義者ではありませんでした。彼らは、ひとりひとり、キリストのからだとしての教会という一つの全体性の中に生かされているのです。ガリラヤの山に集められた集団は、すでに「二つのものを一つにし」「二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げ」「両者を一つのからだとし」かくして「神の家族」となった人々であります(エペソ二一一―一九)。

これは、人間の力で組織できる集団ではありません。また、人間の力で到達できる理想の社会を描いているのでもありません。教会という現実には、あくまでも神の超自然的な大能の力によって生まれ、造られるものであります。キリストの福音が宣べ伝えられ、それを聞く人の心の中に信仰が起こされ、悔い改めて、御名のバプテスマが授けられるとき、そのような人々の集団において、キリストのからだとしての教会が認められます。特に、キリストが復活された主の日を覚えて、信者が礼拝のために集まるとき、キリストのからだは、具体的な形をとって現われ、機能しているのを見ることが出来ます。

しかし、キリストのからだとしての教会の働きは以上のことで尽きるものではありません。それは、ほんの一部分の

表現に過ぎません。ところが、わたしたちはともすると、極く狭い意味の教会的な働きがなされるだけで満足し、それ以上のことを求めないという傾向があります。この教会人の視野の狭さは、聖書の教会観によって打破されなければなりません。極端な言い方をすれば、人がキリストを受け入れて教会に加入したとしても、説教者が、聖書に基づいて、信者の生活全体が神にささげられるべきこと、日常生活のすべてを含めて、キリストのからだなる教会は形成されなければならぬこと、教会とは、最も包括的な、人間の生の全領域にわたる一つの全体性としての働きであること、を教えないとすれば、そこには事実として何も起こっていないと言わなければなりません。なぜなら、福音が解放の力であることが、今日の人々が捕えられている奴隷状態にたいして徹底的に現わされなければならないからであります。福音によって解放されなければならない人間は、その生の一部分が不自由になっているのではなく、生の全体性が奴隷となっているからであります。

この説教において、「全体性」という言葉を特に用いているのは、実は理由があります。これは和辻哲郎博士が好んで用いられた用語であります。名著「風土」は、日本ユネスコ国内委員会によって英訳が出版されているために、日本に関心をもつ外人にも多く読まれております。IARFA四三号には、当学会の会員であられるCRCのH・スミット博士が「日本人の心性とキリスト教信仰の出会い」と題する論文を寄稿しておりますが、その中でも本書への言及が見られます。一節を引用したいと思います。

「かくして我々は『家』としての存在の仕方が特に顕著に国民の特殊性を示すことを承認しなくてはならぬ。ところで日本の人間がその全体性を自覚する道も、実は家の全体性を通じてなされたのである。人間の全体性はまず神として把握せられた。しかしその神は歴史的なる『家』の全体性としての『祖先神』にはかならなかった。それは古代における最も素朴な全体性の把握であるが、しかし不思議にもその素朴な活力が国史の展開を通じて活き続けている

のである」(一四七ページ)。

この文章について多くの解説をする必要はないと思います。日本人をしるこの全体性がいかに恐るべき力をもっているかということはお互にいやというほど体験しているはずであります。神道的偶像礼拝との戦いは、われわれ日本人の全生活的な戦いであると言わねばなりません。日本人の神を祖先神としてとらえる理解は、柳田国男においてもみられます。この点について批判をもつ学者もあるようですが、われわれの生活の実感と一致する鋭い洞察として、この二人の偉大な学者の発言に私は注目するのです。

最近、都市化、核家族化の急速な進展が、家の基盤である農村を崩壊させつつあるために、日本人の意識を支配する家の全体性は無くなるのではないかと考えられています。東京の教会が取り組まなければならない問題は、いわゆる世俗都市の問題であるかもしれません。しかし、日本人であるということが、もっと根本的なものとして、日本の巨大都市の問題を欧米のそれとは別のものにしていていると思えます。巨大な世俗都市の中では一切のものが相対的で、雑然としております。宗教も例外ではありません。しかし人々は、この雑然とした相対性の中で、結局、都市そのものを一つの全体性として感じているのであります。

日本では、「ハレ」と「ケ」という言葉で聖俗二元が言い表わされますが、「ハレ」にせよ「ケ」にせよ、日本人は、衆をもって、全体として参加したものであります。そして、現代の巨大都市における「ハレ」と「ケ」のリズムは、正月に有名な神社に参拝する何百万という人々、あるいは大衆運動としての新興宗教の活動に参加する何十万という人々において不気味にも表現されているのです。

この日本列島の中にたぎっている単一民族のエネルギーを思う時、キリスト教会は、われわれの国において、実に容易ならぬ挑戦を受けていると感じずにはおられません。教会が、もし日曜日には礼拝に集まるが、週日は全く世俗的

全体性の流れに押し流されっぱなしの信者を造ることで満足しているのであれば、日本の教会はまさに、「日本教キリスト派」であることから永久に脱皮できないでありましょう。しかし、聖書の主張はそうではありません。復活の主が、ガリラヤの山で弟子たちに命じられたことは、神の主権を生活の全体性において告白する教会を建てよということでもあります。

第二の点を、以上の主張との関連において簡単に述べます。復活の主は、「わたしがあなたがたに命じておいたすべてのごを守るように、彼らに教えなさい」とお命じになりました。教会にはその歩みを定め導く命令が与えられているのです。

パウロも「割礼を受けているか受けていないかは、大事なことではありません。大事なのは新しい創造です。どうか、この基準に従って進む人々、すなわち神のイスラエルの上に、平安とあわれみがありますように」と言っております(ガラテヤ六15-16)。教会とは、割礼に象徴される一つの全体性の奴隷状態から、神の新しい創造のみわざとてつくり出されたものにほかなりません。そしてこの新しい創造としての霊のイスラエルには、昔のイスラエル同様、「規準」が与えられております。この規準は、神の言としての聖書であります。

大切なことは、聖書が新しい創造の規準として機能するために与えられているということとを正しく理解することです。聖書をより所にしたくない教会人はいないわけですし、特に福音主義教会においてこのことは自明のことです。しかし、聖書を新しい創造の規準として機能させるといふことは、決してわかりきった、容易な事ではありません。聖書の靈感を信じておれば、それで聖書が、新しいイスラエルに対する神の權威ある言葉啓示として働くという保証はありません。教会人の肉の思いが、実は聖書を人間的な標語、キャッチ・フレーズ、命題、教理の手引き、

道徳的説話などに変えてしまうのです。そのようなとき、説教者がいかに權威ぶって語っても、新しい創造のみわざは起こりませんし、また、その全生活を聖霊のご支配にゆだねる聖書的生活の実践に押し出されるといふ運動が、教会に起こることを期待することもできません。

「インタープリテーション」誌は、今年の一月号で二十五周年記念特集を行なっておりますが、その中で、J・バー教授が「旧約聖書と聖書の權威の新しい危機」と題する論文を寄稿しております。その中で教授は、英国において、聖書神学の黄金時代がつい最近まで続いたにもかかわらず、教会人の間に、聖書、特に旧約聖書にたいする驚くべき無関心がひろがりつつあることを伝えております。いわゆる福音主義的神学者が、これらの聖書神学の業績の恩恵に浴してきただけに、この発言のもつ意味をよく考える必要があります。現在、わたしたちの教会において、聖書が真に新しい創造の規準と呼ぶにふさわしいだけの權威をもって、神の創造のみわざの全領域にわたって働いているでしょうか。日本の中に真の全体性としてのキリストのからだなる教会を建設する指針として、正しくこれが用いられているでしょうか。

説教者、神学者としての使命を与えられているわたしたちひとりひとりの責任は、まことに大きいことを痛感いたします。もう一度、ガリラヤの山の弟子たちの立場にかえって、主のご命令に深く耳を傾けたいと願います。願わくは、三位一体の神が、この学会を祝し用い、み国建設のわざにあたらせてくださるようにならせますように。アーメン。

(神戸改革派神学校教授)